

19世紀後半から20世紀初頭 におけるロシアの穀物生産 — 穀物輸出の影響 —

富岡 庄 一

I. はじめに

ロシアの貿易構造は、1880年代を境として、大きく変化する。つまり、食料品輸出体制が成立して、貿易収支の大幅黒字基調が固められる。輸出される食料品の中核を占めたのが穀物である。80年代には、輸出される穀物の種類も、大きく変化する。つまり、それまでは、殆ど専ら小麦輸出に依存していたか、又は一時的にライ麦とエン麦の輸出が多かったのに対して、小麦に加えて大麦が、輸出穀物の中で重要かつ安定的な地位を次第に占めるようになる。一方、ライ麦とエン麦の輸出は相対的・絶対的に減少してゆく。即ち、80年代の食料品輸出体制の成立は、小麦と大麦の輸出体制の成立を背景として、初めて可能となったといえよう。¹

このような、小麦と大麦を中心としたロシア穀物輸出体制の成立は、国際穀物市場の動向に対応したものであった。

ロシアの穀物輸出にとって、最大の輸出先はドイツになりつつあった。ドイツは、70年代後半以降穀物の輸入国に転ずる。ドイツでは、工業化・都市化の進行、そして輸入証明書制度の導入などによって、特に小麦と大麦の輸入が増加する。

ロシアからの小麦の輸出先は、大体80年代を境にして、イギリスから南欧（イタリア・フランス）、オランダ（つまりドイツ）に移動する。この移動は、輸出小麦の種類の変化を伴っていた。つまり、70年代までの輸出小麦は、主としてイギリス向けの比較的軟質の小麦であったのが、80年代以後、南欧への硬質小麦、及び中欧への軟質小麦が中心となってゆく。イギリスの小麦輸入においてロシアが後退していった原因として

は、(1) 海上輸送費の低落による合衆国などとの競争の激化、(2) イギリスが要望する小麦の品質にロシアが応えられなかったことなどがあげられる。他方、イタリアやフランスでは、人口の増加・工業化の進行に伴って、穀物需要が増大していった。保護貿易主義の台頭、国内農業の発達にもかかわらず、穀物の輸入、とりわけ硬質小麦（スパゲッティ、マカロニ用）の輸入は不可欠であった。ロシアは、その種の小麦の最大の輸出国であった。

大麦は、飼料用をはじめとして需要が急増しつつあり、しかも供給者としてのロシアの地位は安泰であった。ロシアからの大麦の輸出先は、80年代を境にして、イギリスからドイツに移動する。但し、イギリスの側から見て、ロシアは依然として重要な供給先であった。

ライ麦の世界貿易は、絶対的に減少傾向にあった。更に、ドイツが輸出国として台頭しつつあり、ロシアは、かつてのような圧倒的な優位を急速に失っていった。

世界のエン麦輸出においても、ロシアの地位は安泰ではなかった。アルゼンチンの台頭が顕著だったのである。

輸出穀物の中軸となるのは、国際的に大きな需要が見込まれ、かつロシアが競争上優位に立ち得るものでなければならなかった。つまり、小麦と大麦がそれであった。ロシアの穀物輸出構造は、世界穀物市場の状況、とりわけロシアから穀物を輸入する国々の市場状況（貿易動向）の変化に対応するかたちで、変遷していったといえよう。²

急速な工業化を追求していたロシアとしては、それに伴う輸入（機械をはじめとする）の増加、及び多額の外国資本の導入を可能とするために、貿易収支の安定的な黒字を確保する必要に迫られていた。上記の如き穀物輸出構造の変遷は、ロシアにとって不可避であった。

さて、本稿では、穀物輸出の動向が、ロシア農業のあり方とどのように関連していたのかを検討したい。従って、ロシア農業といっても、ここで取り上げるのは主要四穀の生産動向である。それも、ヨーロッパ・ロシア全域を視野に入れつつ、せいぜい県単位の大まかな地域区分で、検討する。（末尾の地図をあわせて参照されたい。）

穀物の輸出と生産との関連を問う場合、両者の媒介環として、ロシア国内での穀物商品化の状況を先ず検討する。穀物生産については、収穫

量、播種面積、播種量の各側面からみてゆく。

本論に入る前に、ロシアの穀物生産にとって、穀物輸出がどの程度の意義を持っていたかを概観しておこう。

1890年代における、主要四穀の輸出比率（収穫重量に対する輸出重量の比率）は、

小麦：90年代前半に38.4%，90年代後半に32.7%
大麦：90年代前半に35.6%，90年代後半に30.5%
ライ麦：90年代前半に 6.5%，90年代後半に 8.5%
エン麦：90年代前半に13.1%，90年代後半に10.5%
であった。³

又、1900年代の主要四穀の輸出比率は、

小麦：1900年代前半に25.7%，後半に24.6%
大麦：1900年代前半に29.1%，後半に35.1%
ライ麦：1900年代前半に 5.9%，後半に 3.5%
エン麦：1900年代前半に10.5%，後半に 7.4%

であった。⁴

大麦を除いて、他の主要穀物の輸出比率は、時期を下るに従って低下傾向にある。とりわけ、ライ麦とエン麦の輸出比率の低下が顕著である。小麦の輸出比率も低下している。しかし、第1次大戦に至るまで、小麦は大麦と共に、穀物の中で輸出比率が飛び抜けて高かったことに変わりはない。

その小麦と大麦を特に多く輸出した地方はどこであろうか。1908—11年に、小麦を多く輸出（1500万ブード以上）している県は、ヘルソン、エカテリノスラフ、ドン、サマラ、そしてクバン州であり、地域的には、南部ステップ、南東部（ボルガ下流域）、北カフカース、である⁵。大麦の場合は、ヘルソン県、エカテリノスラフ県、クバン州などの、南部ステップ、北カフカースの地域である。⁶

以上の諸点を、取敢えずおさえておきたい。

[注]

1. 拙稿「ロシア貿易構造の転換—統計的分析による一試論—」（北星学園

- 大学経済学部紀要『北星論集』1983年第21号)
2. 拙稿「19世紀半ばより20世紀初めにおけるロシアの穀物輸出一国際穀物市場の影響一」(北星学園大学経済学部紀要『北星論集』1984年第22号)
 3. Вестник Финансов, промышленности и торговли. Ио. 51, 1901, стр. 556
 4. П. И. Ляшенко, Зерновое хозяйство и хлеботорговые отношения России и Германии в связи с таможенным обложением, Пгр., 1915, стр. 149, 162, 176, 186
 5. Там же, стр. 37
 6. Там же, стр. 43

II. 穀物の商品化

穀物の商品化(商品生産)の進行を、穀物輸送量の増え具合でもって判断する場合が多い。ここでも、一応それに従うことにする。

但し、輸送統計は、トランジットを区別出来ないという問題点などもあって、その地域での穀物の商品生産を直接反映しているとは言い難い面もある。¹

又、輸送統計自体が、穀物の輸送状況を正確に示しているかどうかとも直ちに判じ難い。というのは、統計資料を用いて、穀物の輸送量を把握しようとする場合、主として鉄道輸送統計に依存せざるを得ない。しかし、鉄道は穀物輸送において、主要な運輸手段ではあったが、水路輸送も、特にボルガ河流域のような地域では、決して無視できぬ運輸手段であった。²短距離輸送や、南部ステップで黒海・アゾフ海の港へ運ぶ(従って、大部分は輸出向)場合、荷馬車が頻繁に用いられたことにも留意せねばならない。³更に、商品化される穀物の一定部分(ライ麦を主とする)は、生産地の地元で消費された。つまり、主として貧農が消費したといわれる。⁴税金の支払いその他の為に、貧農は、自ら生産した穀物の販売を余儀なくされ、それを再び買い戻さねばならなかったことは、よく指摘されるところである。この場合は、穀物が鉄道で輸送されないことも多かった。

以上のような問題点が存するのを確認した上で、論を進めることにする。

19世紀から20世紀初頭におけるロシアの穀物生産

まず、主要穀物全体の輸送における、輸出向と国内向との関係をみてみよう（表.1）。19世紀末から20世紀初めにかけて、主要穀物の輸送量

表.1 主要穀物の輸送における輸出向と国内向の比率
（数値は年平均。以下の諸表においても同様）

	輸送量合計 (百万ブード)	輸出向 (%)	国内側 (%)
1895—99	567.2	57	43
1900—05	722.4	55	45
1906—10	897.6	52	48

出典 T. M. Китанина, указ. соч., стр. 126

注 この表の数値は、鉄道輸送を中心としてキタニナが推算したものである。キタニナは、鉄道輸送と水路輸送とを合計した穀物の輸送量を、1901—05年に1237(百万ブード)、1906—10年に1339、1911—13年に1317と推計している。

(T. M. Китанина, указ. соч., стр. 30)

合計は、約1.6倍に増えている。又、輸送される穀物の内、輸出向の方が国内向よりも多く、過半を占めている。但し、輸出向の比重は低下傾向にある。国内向輸送、つまり国内消費が増えたのは、一般的には工業化・部市化の進行の結果である。ただ前述の如く、農村での貧農による穀物の購入も無視出来ない。

ところで、穀物の国内消費が増えたとはいっても、輸出向が国内向を凌駕していることに示されるように、増加しつつある穀物生産を国内だけで総て吸収することは到底出来ず、どうしても輸出市場に依存せざるを得なかった。輸出市場の重要性が減じたわけではない。むしろ、当時の資本主義世界体制におけるロシアの位置付けを考慮すれば、輸出市場は、ロシアの農業にとっても決定的に重要であったといえよう。

穀物の種類別に、輸送動向をみる（表.2）。まず、絶対量では、輸出向輸送において、小麦と大麦の伸長が顕著である。1911—12年に小麦の輸出向輸送量が落ち込んでいるのは、1911年の凶作の影響が一定程度あるものと思われる。エン麦の輸出向輸送量は停滞的で、ライ麦のそれは大きく減少している。国内向でも、小麦の増加が最も著しい。小麦の国

表.2 鉄道輸送される穀物における輸出向と国内向の区別

	国 内 向 (百万ブード)	向 (%)	輸 出 向 (百万ブード)	向 (%)
1896-00				
全穀物	257.0	44.7	318.0	55.3
小麦	62.6	41.8	87.4	58.2
大麦	9.1	24.6	27.9	75.4
ライ麦	28.9	40.7	42.2	59.3
エン麦	43.3	47.7	47.4	52.3
1901-05				
全穀物	327.9	44.1	416.8	55.9
小麦	89.8	43.2	118.4	56.8
大麦	13.7	22.6	47.0	77.4
ライ麦	36.0	42.4	48.8	57.6
エン麦	47.7	40.2	71.0	59.8
1906-10				
全穀物	434.5	48.4	463.0	51.6
小麦	123.4	44.8	151.9	55.2
大麦	18.9	19.0	80.7	81.0
ライ麦	53.3	66.7	26.6	33.3
エン麦	56.8	48.0	61.6	52.0
1911-12				
全穀物	485.6	48.9	509.1	51.1
小麦	148.7	57.9	117.1	42.1
大麦	20.8	17.0	101.3	83.0
ライ麦	46.1	58.8	32.3	41.2
エン麦	69.3	50.9	66.9	49.1

出典 П.И.Лященко, указ. соч., стр. 27, 28

内向輸送が増加したのは、主として都市で消費されるパンが、黒パンから白パンに移行しつつあったことの反映である。エン麦・ライ麦の国内内向輸送はやや増加傾向にある。大麦の国内内向輸送量は最も少なく、又増加の程度も緩慢である。各穀物の輸出向比率は、大麦を除いて、年代と共に低下傾向にある。但し、小麦と大麦とは、絶対的にも相対的にも、輸出穀物の双壁であったことに変わりはない。特に、大麦輸出の増加が顕著である。反対に、ライ麦の輸出向輸送は絶対的・相対的に著しく減少している。

生産地域別に、鉄道及び水路による、主要四穀の輸送動向をみてみよう(表. 3)。搬出される穀物の絶対量が多いのは、80年代後半で南部ステップと中央黒土である。以後時期が下るに従って、搬出量が急速に増大してくるのが、まずもって南部ステップ、次いで南東部ステップ、中南部黒土(搬出量の大半は、サラトフ県が占めていた)である。中央黒土はやや増加するのみである。

各地域に含まれる個々の県についてはどうであろうか。穀物の収穫量・搬出量が相対的に多く、かつ収穫量に対する搬出量の比率も比較的高い県は、80年代後半でヘルソン、エカテリノスラフ、ドン、サラトフ、サマラ、タンボフなどである。90年代になっても、これらの諸県が、穀物の搬出において他を抜き出ている。とりわけ、ヘルソン、エカテリノスラフ、サラトフ、サマラでの搬出量の増加が著しい。1900—07年においても穀物の搬出が顕著であった県は、ヘルソン、エカテリノスラフ、ドン、サラトフ、サマラ、タンボフなどであるが、とりわけ多いのがヘルソン、エカテリノスラフ、サラトフ、サマラの4県で、中央黒土のタンボフはそれら4県との間に水を開けられるようになる。1908—13年になると、その傾向は益々顕著になる。ヘルソン、エカテリノスラフ、サラトフ、サマラに加えてドンの諸地域が、穀物の搬出において他を圧しており、タンボフ県は伸び悩んでいる。このように、19世紀末から20世紀初めにかけて、穀物を主として搬出するようになるのは、南部ステップとボルガ下流域(サラトフ、サマラ)である。他方、中央黒土は後退してゆく。もともと、中央黒土は依然として、国内市場に対する穀物の主要な供給地ではあった。

なお、穀物の搬出量が減少したのは、ノヴゴロト、トヴェーリ、ミン

表.3 地域別主要穀物の搬出量(鉄道及び水路による搬出量)

(単位:百万ブード)

	1884—91	1892—99	1900—07	1908—13
北 西 部	14.5	13.3	15.1	14.2
西 部	4.7	4.3	3.3	3.9
中 西 部	15.5	13.1	21.5	18.2
沿ウラル地方	25.9	30.4	58.8	65.8
中 央 黒 土	88.5	94.2	122.7	138.0
ボルガ中流域	41.5	46.4	71.7	72.5
中 南 部 黒 土	34.0	62.7	99.9	111.2
ドネプル左岸域	23.6	33.2	63.1	76.6
南部ステップ	105.0	174.9	219.6	296.6
南東部ステップ	42.2	67.5	106.2	134.2

出典 Л.А.Авакова, указ. соч., стр. 108-9

この表で用いられている地域区分は、通常のものとは若干異なるので、各地域に含まれる諸県を示しておこう。

北西部(ドヴェーリ、プスコフ、ノヴゴロト、ヴォログダ)

西 部(ミンスク、ヴィテプスク)

中西部(スモレンスク、カルーガ、チェルニゴフ、モギリョフ、ヴォルィンスク)

沿ウラル地方(ヴャトカ、ベルミ、ウファ)

中央黒土(トゥーラ、オリョール、クルスク、タンボフ、ペンザ)

ボルガ中流域(ニジェゴロト、カザン、シンビルスク)

中南部黒土(ヴォロネジュ、サラトフ)

ドネプル左岸域(ハリコフ、ポルタフ)

南部ステップ(ヘルソン、エカテリノスラフ、タヴリタ、ドン)

南東部ステップ(サマラ、オレンブルク、アストラハン)

スク、ヴィッテプスク、モギリョフ、チェルニゴフ、ポドリスクなど、主として西部の諸県であった。その理由は、西部地域では、穀作以外の農業部門に特化していったからである。例えば、畜産、ビート・ジャガイモ・大豆などの栽培である。⁸

各地域で、輸送に回される穀物の内、どれだけの部分が輸出されたのだろうか。ただ、今のところ、20世紀に入ってからのものである時期に関する数値しか利用しえない。表. 4によれば、1901—03年の時期と1908—11

年の時期とを比較すると、穀物生産地域の中で、ドネプル右岸域、南部ステップ、北カフカースなどにおいて、輸出向の比率が増加している。なお、ボルガ流域、特に左岸域では、輸出向穀物が水路で輸送されることもあったため、この表では輸出向比率が過少に評価されている。⁹ 以上のような地域が、輸出向穀物生産地域としての重要性を益々増大させたといえよう。先にあげたアヴァコヴァの表では、ヨーロッパ・ロシアしか扱っていなかったため、北カフカースは登場しなかったが、ここで明らかのように、北カフカースも、輸出用穀物の生産地域として重要な存在であった。

多くの小麦を、輸出向に鉄道で搬出している地域は、1900年代で、ボルガ左岸域、ドネプル右岸域、南部ステップ、ボルガードン地域、北カフカースなどであった。¹⁰ 又、大麦は、1900年代で、ドネプル右岸域、南部ステップ、北カフカースなどである。若い生産地域である南部は、小麦、大麦、ライ麦を大いに輸出した。¹¹

中央黒土をはじめとして、以前からライ麦を主として生産していた地域では、徐々に輸出から離れ、専ら国内市場に供給するようになってゆく。この地域で生産される小麦も主に国内向であった。ただ、この地域で生産されるエン麦だけは輸出にも向けられた。¹²

19世紀後半のロシアで、鉄道の導入以来、穀物の商品化が著しく進行

表.4 搬出穀物(鉄道輸送分)の国内向と輸出向：生産地域別

	1901 - 03		1908 - 11	
	国内向 (%)	輸出向 (%)	国内向 (%)	輸出向 (%)
ボルガ中流域	69.4	30.6	72.1	27.9
ボルガ左岸域	87.7	12.3	72.0	28.0
ドネプル右岸域	34.1	65.9	29.1	70.9
南部ステップ	40.5	59.5	36.1	63.9
ドネブルードン	62.3	37.7	70.2	29.8
ボルガードン	63.7	36.3	62.6	37.4
北カフカース	33.1	36.9	31.8	68.2

出典 П. И. Лященко, укав. соч., стр. 32

したといわれる。商品穀物の代表は小麦と大麦であった。小麦は、輸出市場においても国内市場においても、穀物流通の中心にあった。しかし、小麦の国内消費は増大しつつあったが、国内だけで、生産される小麦を消化することは不可能であった。ロシアにおける小麦の生産を決定する主たる要因は、国内市場ではなく、輸出市場であった¹³といえよう。又、大麦は、すぐれて輸出用の商品穀物であった。¹⁴

農業における商品生産の進行は、地域間分業を伴っていた。南部ステップ、南東部(ボルガ下流域)、北カフカースなどの地域は、穀物の商品生産に特化していった。中央黒土は、国内市場への穀物供給地としての地位は保持する。西部地域では、穀物から他の農産物への転換が進む。ちなみに、南部ステップの穀物商品化率は、総収穫量の44—45%、中央黒土のそれは20—30%、ロシア全体のそれは34—35%であった¹⁵。冒頭でおさえたように、南部ステップ、南東部(ボルガ下流域)、北カフカースは、小麦・大麦の主要な輸出地帯であった。

以上、ロシアにおける穀物の商品化は、穀物輸出の動向と密接に関連していたことが分かる。

[注]

1. Л. А. Авакова, Новые материалы о развитии торгового земледелия в европейской России в конце 19—начале 20 века, 《История СССР》, Ио. 6, 1982, стр. 108
2. П. И. Лященко, указ. соч., стр. 32
3. Л. А. Авакова, указ. соч., стр. 108
4. Т. М. Китанина, Хлебная торговля России в 1875—1914 гг., Ленинград, 1978, стр. 125—6
5. П. И. Лященко, указ. соч., стр. 46
6. ドップロフスキー(有馬達郎訳)『革命前ロシアの農業問題—ストルイピン土地改革の研究—』(東京大学出版会, 1971年) 417ページ
なお、ライ麦は、農村住民の大多数にとって依然として主要な食料であったことに変わりはない。(А. С. Нифонтов, Зерновое производство России во второй половине 19 века, Москва, 1974, стр. 255)
7. Л. А. Авакова, указ. соч., стр. 104—5の表による。本稿では省略する。
8. Там же, стр. 107

9. П. И. Лященко, указ. соч., стр. 32
10. Там же, стр. 148
11. Там же, стр. 186
12. Там же, стр. 45
13. Там же, стр. 147—8
14. もちろん、大麦は国内で全く消費されなかったわけではない。特に北部、バルト沿岸、ウクライナ左岸では、食料、飼料の不足を補うためやビールの製造用として、消費が増大したという。
(А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 261)
15. Л. А. Авакова, указ. соч., стр. 109

III. 収穫量の動向

農奴解放後のロシアでは、穀物の収穫量が年々増加してゆく。収穫量の平均増加率は、60年代に5%、70年代に13%、80年代に16.6%、90年代には18%であったという。¹

そのような収穫量全体の増加傾向の中で、ロシア農業は大きく変わってゆく。ニフォントフによれば、1860—70年代と80—90年代とを比べると、穀物の商品化が拡大しただけでなく、穀物播種量、収穫量、単位面積当りの収穫量、穀物生産の地域特化、などの点で大きく異なるという。又、リャシチェンコは、1880年代以降、ロシアの主要穀作地帯で、生産される穀物の種類が急速に変化していった点を指摘している。つまり、ライ麦から小麦・大麦への移行が顕著であった。このように、ロシア農業は、80年代を境にして、大きく変化する。以下ではこれらについて、主要4穀の生産状況を中心として、より詳しくみてみよう。

まず、穀物の種類別にみて、収穫量がどのように推移していったであろうか(表. 5)。ロシアの代表的な作物であったライ麦・エン麦の比重は年々低下している。特にライ麦の減退が顕著である。それに対して、小麦・大麦の比重は上昇している。とりわけ、大麦の台頭が著しい。小麦は、20世紀に入ると、エン麦を抜いて、ライ麦に次ぐ第2の地位を占めるようになる。つまり、ロシア農業の主要穀物が、ライ麦・エン麦から小麦・大麦へと移動しつつある。

表.5 穀物の収穫に占める主要四穀の比率

	全穀物 (百万ブード)	小麦 (%)	大麦 (%)	ライ麦 (%)	エン麦 (%)
1886—90	2,244.0	15.7	8.2	43.2	23.1
1891—95	2,488.0	18.2	10.8	40.0	21.4
1896—00	2,735.0	18.3	10.0	39.9	21.8
1901—05	3,205.8	22.9	10.9	36.9	20.8
1906—10	3,211.2	22.8	13.0	33.2	21.2
1911—13	3,655.9	21.7	13.6	34.1	20.6

出典 П. И. Лященко. укав. соч., стр. 11-2

次に、地域別に、主要穀物の収穫量の動向をみてみよう(表.6)。小麦では、秋蒔小麦よりも春蒔小麦の伸び方が遙かに顕著である。特にボルガ中・下流域、新ロシア(南部ステップ)などで、春蒔小麦の収穫量の増加が著しい。一方、秋蒔小麦の収穫量が停滞ないしは減少しているのが、中央農業地帯(中央黒土を中心とした地域)とボルガ中流域である。中央農業地帯は、春蒔小麦においても、収穫の増加が緩慢である。⁴

大麦の収穫量が特に顕著に増大したのが、新ロシアである。他方、ボルガ中流域だけは減少している。

小麦と大麦は、地域による格差はあるものの、全体として収穫量の伸びが著しいのに対して、ライ麦とエン麦は、極めて停滞的である。収穫量が比較的大きく増加したのは、ライ麦では南西部と新ロシア、エン麦ではボルガ中流域、小ロシア、南西部、新ロシアなどである。ライ麦でもエン麦でも、中央農業地帯の停滞状況が目をはひく。

穀物の単位面積当りの収量は、ロシアの場合、国際的に比較して、極めて低位であった⁵。但し、ロシア内部では、穀物の単位面積当り収量の上昇がみられなかったわけではない。小麦では、80—90年代に急速に上昇している。特に顕著であったのが南部ステップとウクライナ左岸域である。ライ麦でも、80—90年代に或る程度上昇している。ライ麦の単位面積当り収量が最も高かったのはバルト沿岸地域で、上昇率が高かったのが南部ステップと沿ウラル地方である。エン麦の場合は、単位面積当り

19世紀から20世紀初頭におけるロシアの穀物生産

表.6 主要穀物の地域別収穫量の変動(1886-90年を100.0とする)

秋 蒔 小 麦	1886-90	1891-95	1896-00	1901-05	1906-10
中央農業地域	100.0	71.2	75.6	95.3	65.3
ボルガ中流域	100.0	53.1	68.6	132.3	90.4
ボルガ下流域	—	—	—	—	—
小 口 シ ア	100.0	86.9	106.0	178.9	173.8
南 西 部	100.0	110.9	123.7	195.3	139.9
新 口 シ ア	100.0	134.9	105.2	200.9	216.2
春 蒔 小 麦	1886-90	1891-95	1896-00	1901-05	1906-10
中央農業地域	100.0	105.9	110.5	154.2	151.2
ボルガ中流域	100.0	132.2	177.3	197.6	316.6
ボルガ下流域	100.0	125.6	195.6	267.7	295.6
小 口 シ ア	100.0	149.8	161.9	221.7	219.6
南 西 部	100.0	151.6	142.9	227.8	167.9
新 口 シ ア	100.0	135.1	214.4	334.5	331.8
大 麦	1886-90	1891-95	1896-00	1901-05	1906-10
中央農業地域	100.0	149.2	142.6	197.5	176.2
ボルガ中流域	100.0	65.0	66.5	70.6	65.8
ボルガ下流域	100.0	118.6	178.6	222.6	183.5
小 口 シ ア	100.0	148.0	136.9	187.0	169.5
南 西 部	100.0	141.9	136.4	182.4	231.0
新 口 シ ア	100.0	206.8	204.1	292.9	385.3

秋蒔ライ麦	1886-90	1891-95	1896-00	1901-05	1906-10
中央農業地域	100.0	87.2	96.7	104.1	94.4
ボルガ中流域	100.0	97.8	116.4	115.2	137.0
ボルガ下流域	100.0	104.9	117.2	118.7	120.5
小 ロ シ ア	100.0	109.1	107.6	132.9	106.9
南 西 部	100.0	119.2	139.1	178.9	149.8
新 ロ シ ア	100.0	108.3	86.6	192.2	112.0
エ ン 麦	1886-90	1891-95	1896-00	1901-05	1906-10
中央農業地帯	100.0	83.5	82.6	99.4	107.1
ボルガ中流域	100.0	88.2	119.4	156.4	163.5
ボルガ下流域	100.0	87.3	121.8	131.4	134.1
小 ロ シ ア	100.0	126.3	138.0	175.6	165.7
南 西 部	100.0	129.5	132.5	176.4	179.6
新 ロ シ ア	100.0	114.0	131.1	156.1	158.3

出典 П.И.Лященко, указ. соч., стр. 12-3

収量の変化は緩慢であった。⁶

以上、総じて言えるのは、穀物の種類では春蒔小麦や大麦といった輸出穀物の収穫量の増加が顕著であったこと、及び地域では新ロシアをはじめとする穀物の商品生産地帯（そして穀物輸出地帯）で穀作が大いに発展したことである。しかも、この地域では、穀物の生産性の上昇が相対的に著しかった。反対に、穀物を主として国内向けに生産していた地域（特に中央農業地帯）では、収穫量の伸びが劣っていた。なお、この地域でも、ライ麦・エン麦から小麦・大麦への移行傾向はみられる。ロシア農業において、このような変化が明瞭に現れてくるのが80年代以後のことである。⁸

[注]

1. А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 266
2. Там же, стр. 315
3. П. И. Лященко, указ. соч., стр. 20
4. 秋蒔小麦と春蒔小麦との量的関係としては、次の数字がある。
秋蒔小麦は、1909—13年の、ロシア82県・州の平均収穫量が426.1（百万ブード）
春蒔小麦は、1908—12年の、ロシア63県・州の平均収穫量773.2（百万ブード）
なお、ライ麦は、秋蒔ライ麦が圧倒的である。例えば、秋蒔ライ麦は、1909—13年の、ロシア82県・州の平均収穫量が1318.2（百万ブード）
春蒔ライ麦は、1908—12年の、ロシア63県・州の平均収穫量が18.8（百万ブード）
（Вестник финансов, промышленности и торговли, Ию. 16, с. 103）
5. ドゥプロフスキー、前掲書、396ページ
6. А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 275—7
7. П. И. Лященко, указ. соч., стр. 13
8. А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 273

IV. 播種面積の動向

農産物の播種面積全体が、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、どのようにして推移したかについては、今のところ十分な数字を得ていない。しかし、1860年代から80年代半ばにかけての耕地面積の変化をみると、非黒土地帯では、北部の工業地域を中心としてやや減少したのに対して、黒土地帯では著しく増加している（約50%の増）¹。又、1900年以降の、主要作物の播種面積は、全ロシア（黒土地帯、非黒土地帯、ステップ辺境、北カフカース、シベリア）で、1901—05年に74.8（百万デシャチナ）、1906—10年に78.4、1911—15年に85.2、と増加している。²

農産物の播種面積全体に占める穀物の播種面積の比重は、黒土地帯で、1901—05年に92.5%、1913年に91.4%、非黒土地帯で、1901—05年に86.3%、1913年に84.4%であった³。穀物の播種面積の比重がやや低下傾向にあるのは、20世紀に入ってから、穀物（穀粒）以外の農産物の播種面積が

拡大していったことの結果である。例えば、綿花、牧草、ビート、ジャガイモなど。しかし、穀物の播種面積が絶対的に大きな比重を占めていたことには変りはない。

主要四穀が、穀物(穀粒)播種面積全体に占める比重をみてみよう(表. 7)。小麦と大麦の播種面積の比重は、80年代にやや低下したが、以後年々上昇している。特に、小麦の播種面積は、90年代後半以降エン麦のそれを凌駕するようになる。小麦の中では、春蒔小麦の播種面積が著増した。秋蒔小麦の播種面積はあまり変化がない。他方、ライ麦とエン麦の播種面積の比重は、80年代にやや上昇した後、長期的に低落傾向にある。特に、ライ麦はそれが顕著である。

黒土地帯と非黒土地帯とを比較してみると、次のことがいえる(表. 8)。黒土地帯では、19世紀末までは、ライ麦の播種面積が小麦よりも大きい。20世紀に入ると、小麦の播種面積がライ麦を凌駕する。又、大麦の播種面積は、1881年から1913年までの間に約3倍に増えている。小麦でも約1.7倍あった。ライ麦とエン麦の播種面積は、その間殆んど増加していない。一方、非黒土地帯では、1881年から1913年までの間、主要四穀の播種面積は相対的に変化がなく、ライ麦、エン麦、大きく離れて大麦、小麦の順である。

より細かく地域別にみると、次の如きである。80年代にライ麦の播種面積が増えた地域は、中央農業地帯(中央黒土を中心とした地域)、小口

表. 7 主要穀物別播種面積の推移

[ヨーロッパ・ロシア50県、全穀物(穀粒)播種面積に占める%]

	小 麦	大 麦	ライ麦	エン麦
1870-74	18.6	7.7	37.4	19.4
1883-87	17.8	7.7	39.9	21.5
1893-95	19.9	9.7	37.8	20.5
1896-00	21.3	10.0	36.3	20.9
1901-05	23.7	10.3	34.9	20.3
1906-10	25.2	11.1	33.6	20.0
1913	25.6	12.4	33.4	19.1

出典 T. M. Китанина, укав. соч., стр. 29

表.8 主要穀物の播種面積(1893年以後は年平均)

(単位:百万デシヤナナ)

	小麦		大麦		ライ麦		エン麦	
	黒土	非黒土	黒土	非黒土	黒土	非黒土	黒土	非黒土
1881	10.1	0.6	2.5	1.7	15.1	8.2	7.7	5.3
1887	10.9	0.6	3.6	1.7	16.6	8.2	8.2	5.4
1893-95	11.5	0.6	4.2	1.7	14.5	8.3	7.1	5.3
1896-00	13.0	0.7	4.7	1.7	14.8	8.5	7.8	5.6
1901-05	15.5	0.8	5.4	1.7	15.5	8.6	8.3	5.7
1906-10	16.9	0.8	6.3	1.6	15.3	8.4	8.5	5.7
1911-13	18.0	0.9	7.0	1.7	15.5	8.6	8.4	5.7

出典 П. И. Лященко, указ. соч., стр. 5-6

シア、ボルガ中流域、南部(新ロシア、ボルガ左岸域)である。しかし、これら地域では、90年代半ばに、ライ麦の播種面積が急減する。中央農業地帯では、場所によっては穀物全体の播種面積が絶対的に減少する。なお、ここでは、依然としてライ麦・エン麦の播種面積が他の穀物よりも大きかった。ボルガ中流域でも、同様の状況が部分的にみられる。もっとも、この地域の東部や南部の辺境では、春蒔小麦の播種面積が着実に増加していた。小ロシアでは、ライ麦の播種面積の減少とともに、春蒔小麦と、部分的には大麦の播種面積が増加し、穀物の播種面積全体が明白に増加傾向にあった。南部では、ライ麦の後退とともに、80年代末-90年代初め以後、春蒔小麦の播種面積が極めて著しく増加した。なお、新ロシア(南部ステップ)では、大麦の播種面積も急速に増加した。北カフカースでは、90年代以後、春蒔小麦だけでなく、秋蒔小麦の播種面積も増加する。⁶

かくして、90年代以後、旧来の農業地域を中心としてライ麦の播種面積が減少し、新たに登場した農業地域で、小麦・大麦を中心として、穀物の播種面積が増大していった。つまり、穀物栽培の中心地が、北部から南部へ移動していったのである。南部ステップでは、1900年に、全播種面積に占める穀物(穀粒)播種面積の比重が95.2%であったのが、1913年になると、97.5%にまで上昇する。ボルガ下流の左岸域では、1900年の

時点で、その比重は89.4%であった。⁹

[注]

1. リヤシチェンコ『ロシア経済史：下』（慶応書房）54ページ
2. Т. М. Китанина, указ. соч., стр. 28
3. リヤシチェンコ, 前掲書, 下, 314ページ
4. 同書, 下, 312—14ページ
5. П. И. Ляшенко, указ. соч., стр. 4
6. Там же, стр. 6—7
7. Там же, стр. 7
8. Там же, стр. 4
9. А. М. Анфимов, указ. соч., стр.

V. 播種量の動向

播種面積についてみたことは、播種量に関してもほぼ同様である。ただ、播種量の動向の特徴は、それが前年の作柄によって直接大きく左右されたことである。¹

表. 9 から次のことがいえよう。ライ麦・エン麦の播種量は、絶対量としては、70—90年代を通じて、小麦・大麦を圧倒的に凌駕している。しかし、小麦と大麦の播種量は、小麦が80年代にやや減少したのを除いて、ほぼ順調に増加し続けている。特に、90年代に入ってから、増加のテンポが早くなる。それに比して、ライ麦とエン麦の播種量は、80年代に増

表. 9 主要穀物の播種量(百万チェトヴェルチ)

	小 麦	大 麦	ライ麦	エン麦
1871—75	8.6	4.8	23.2	22.7
1876—80	8.6	4.8	23.5	22.9
1881—85	8.3	5.1	24.0	25.3
1886—90	8.4	5.1	24.2	26.2
1891—95	9.0	5.9	23.7	25.5
1896—00	10.5	7.0	23.8	27.1

出典 А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 252

加、90年代前半に減少、90年代後半に増加と、時期によって変動が激しく、全時期を通して停滞的（特にライ麦の場合）である。

地域別に、主要穀物の播種量の動向をみてみよう（表.10）。小麦の播種量においては、70年代から90年代にかけて、終始第1位にあった南部ステップでの増加がとりわけ顕著である。一方、中央黒土での播種量が年々減少しているのが注目される。大麦の播種量では、80年代から南部ステップが台頭し始め、90年代には他を圧するようになる。他の地域で、大麦の播種量が比較的多いのは、西部、中央非黒土、沿ウラル地方、ウクライナ左・右岸域などである。ライ麦の播種量では、地域全体の相互の関係は、時期を通じて大体不変である。ただ、中央黒土が減少気味であるのに対して、南部ステップが増加傾向にある。エン麦の播種量は、地域全体の構造は、ライ麦と同様、大体不変である。その中で、中央黒土で減少、他方沿ウラル地方、ボルガ中流域、ウクライナ右岸域、南東部で増加気味である。80—90年代における穀物の播種量の推移の中で、最も大きな地域的変化が生じたのは小麦と大麦の場合である。²

80—90年代のロシア穀作の発展は、地域による播種量の変化を伴っていた。非黒土地帯（北部、北西部、バルト沿岸、西部、中央非黒土、沿ウラル地方）では、70年代から90年代を通じて、穀物の播種量に大きな変化はない。非黒土地帯では、80—90年代においても、穀物の播種量の中でライ麦が大きな比重を占めていた³それに対して、主要な穀作地域である黒土地帯（中央黒土、ボルガ中流域、ボルガ下流域、ウクライナ左岸域、ウクライナ右岸域、南部ステップ、南東部）では、変化が顕著であった。特に、中央黒土での穀物の播種量が年々減少しているのに対し、南部ステップでのそれが増加し続けている点が注目される。これからも、穀作の中心が、旧来の中央黒土から南部辺境に移行しつつあることが分かる。なお、中央黒土とボルガ中流域のみは、播種量の中でライ麦が依然として優位にあった。⁵

最後に、穀物の商品化が最も進行していたとされる私的所有の耕地に限ってみた場合、次のことがいえる。まず注目すべきは、春蒔小麦の播種面積が著しく拡大したことである。特に、ボルガ下流の左岸域（サマラ県、ウファ県）において。他に、ボルガ中流の左岸域（ペルミ県）、南部ステップ、黒土の南部地方、黒土の北部地方などでも春蒔小麦の播種

表.10 主要穀物の地域別播種量(千ヘクタール)

(小 表)	70年代	80年代	90年代
北 部	21	27	26
北 西 部	9	7	10
バルト沿岸	53	41	46
西 部	292	162	156
中央非黒土	188	145	130
沿ウラル地方	384	456	417
中央黒土	960	685	588
ボルガ中流域	169	131	131
ボルガ下流域	1,310	1,008	1,265
ウクライナ左岸域	914	820	907
ウクライナ右岸域	1,066	995	1,047
南部ステップ	2,527	2,939	4,079
南 東 部	695	932	908
(大 表)	70年代	80年代	90年代
北 部	174	183	191
北 西 部	162	141	138
バルト沿岸	296	324	384
西 部	810	675	710
中央非黒土	514	462	367
沿ウラル地方	550	584	519
中央黒土	228	183	257
ボルガ中流域	107	113	74
ボルガ下流域	145	53	75
ウクライナ左岸域	606	628	726
ウクライナ右岸域	622	457	546
南部ステップ	472	1,154	2,358
南 東 部	87	119	84

19世紀から20世紀初頭におけるロシアの穀物生産

(ライ麦)	70年代	80年代	90年代
北 部	258	291	306
北 西 部	688	764	769
バルト沿岸	399	436	470
西 部	2,832	2,822	3,165
中央非黒土	3,254	3,580	3,284
沿ウラル地方	2,130	2,219	2,345
中央黒土	5,804	5,787	5,295
ボルガ中流域	1,549	1,658	1,600
ボルガ下流域	1,453	1,551	1,416
ウクライナ左岸域	2,091	1,777	1,622
ウクライナ右岸域	1,457	1,278	1,393
南部ステップ	803	1,163	1,267
南 東 部	631	801	815
(エン麦)	70年代	80年代	90年代
北 部	408	491	626
北 西 部	1,102	1,297	1,294
バルト沿岸	351	467	677
西 部	2,337	2,434	2,940
中央非黒土	3,880	4,252	3,677
沿ウラル地方	2,954	3,698	3,867
中央黒土	6,528	6,688	6,071
ボルガ中流域	1,144	1,358	1,491
ボルガ下流域	1,074	1,073	940
ウクライナ左岸域	881	895	1,027
ウクライナ右岸域	1,168	1,321	1,647
南部ステップ	401	587	728
南 東 部	615	1,181	1,284

出典 A. C. Нифонтов, указ. соч., стр. 254

面積が拡大した。これら以外の地域では、反対に、播種面積が縮小した。秋蒔小麦の播種面積は、春蒔小麦ほど拡大しなかった。但し、南部ステップでは、秋蒔小麦の播種面積の拡大が顕著で、そのテンポは、春蒔小麦を追い抜くほどであったという。大麦の播種面積の拡大は更に顕著である。南部ステップが最大の拡大地域であった。ライ麦の播種面積は停滞的であった。ボルガ中・下流の左岸域と黒土南部のみで播種面積の拡大がみられたが、他の地域では播種面積が縮小した。エン麦の播種面積は、全体に占める比重が低下した。

このような状況は、播種量についても同様である。ライ麦の播種量は、播種量全体に占める比重を低下させていった。エン麦の播種量も減少した。但し、輸出向に栽培している地域では播種量が増加した。それは南部ステップ、ボルガ下流の左岸域である。南部ステップでは、春蒔小麦の播種量も増加するが、それ以上のテンポで秋蒔小麦の播種量が増加し、1913年には、小麦の全播種量の1/3を占めるまでになる⁶。

〔注〕 1. А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 225

2. Там же, стр. 259, 260

3. Там же, стр. 254

4. Там же, стр. 228—9

5. Там же, стр. 255

6. А. М. Анфимов, указ. соч., стр. 201—3

VI. おわりに

これまで、19世紀後半から20世紀初めのロシアにおける、穀物の商品化の進行具合、及び収穫量・播種面積・播種量などの穀物生産の動向について検討してきた。結論として次のようにいえよう。穀物輸出に益々依存するようになる南部ステップ、東南部(ボルガ下流域)、北カフカースなどで、1880年代を境として、主要な輸出品である小麦・大麦を中心として、穀物生産・商品化が急速に拡大してゆく。一方、穀物輸出の中では傍役となるライ麦・エン麦を生産していた、中央黒土やボルガ中流域といった旧来の農業中心地は、ロシア全体の穀物生産における地位を

低下させてゆく。ここに、ロシアの穀物輸出の動向と穀物生産の動向との間に適接な関連を看取することができる。より積極的には、世界穀物市場の状況によって規定された、ロシアの穀物輸出の動向が、国内の穀物生産のあり方を基本的に決定したといえないだろうか。

ところで、これまでの研究は、19世紀後半から20世紀初めのロシアの穀物生産に変化が生じた事実を指摘してはいた。しかし、そのような変化の原因については、説得的な解答を与えているとはいえない。

例えば、リャシチェンコは、ライ麦・エン麦の播種面積・収穫量が減少し、小麦・大麦のそれが増大した原因として、1. 穀作地域の自然移動。つまり、南部地域の開拓が進んだ結果、その地域が新たな穀作地帯として登場した。その地域では、小麦・大麦の栽培が容易であった。2. 個々の穀物を取り巻く国内の経済条件の変化。ロシアでは、70—80年代にライ麦・エン麦の生産が増えた。その原因は、農奴解放後のロシア農業（農民）を取り巻く経済状態の結果にあった。つまり、新たに展開し始めた商品貨幣経済を生き抜くために、農民が主要な農産物であるライ麦の生産拡大に向かった為である。²地主も又この傾向に従った。その結果、80年代にライ麦の過剰生産、つまり「ライ麦危機」がおとづれた。80年代初め以降、それまでかなり高水準にあった穀物価格が急速に下落し始めた。その結果、ライ麦・エン麦の栽培は損失を生じるようになり、生産が減少した。他方、より大きな利益をあげうる穀物として、小麦・大麦の生産が増えた。³ 3. 他の原因として、国内消費の変化や外国の需要の変化、などを指摘している。その上で、リャシチェンコは、主な原因をロシア農業の自然な発展に求めている。⁴

又、ニフォントによれば、80—90年代における地域別播種量の変動の原因は、1. 農奴制の廃止条件が地域によって異なっていた点。つまり、農民からの土地の切り取りの程度、農奴制の遺制の存続度などが地域によって異なっていた。2. 鉄道建設の影響（特に、辺境地域での）。3. 国内の移住。4. 都市化の進行程度。5. 国内外の市場状況⁵。又、6. 旧来の穀物の播種が限界に達したこと⁶、などがあった。ニフォントフは、これらの諸原因を列挙しているだけである。

以上のように、これまでの研究は、19世紀後半から20世紀初めにかけてのロシアにおける穀物生産の変化の原因として、主として国内的要因

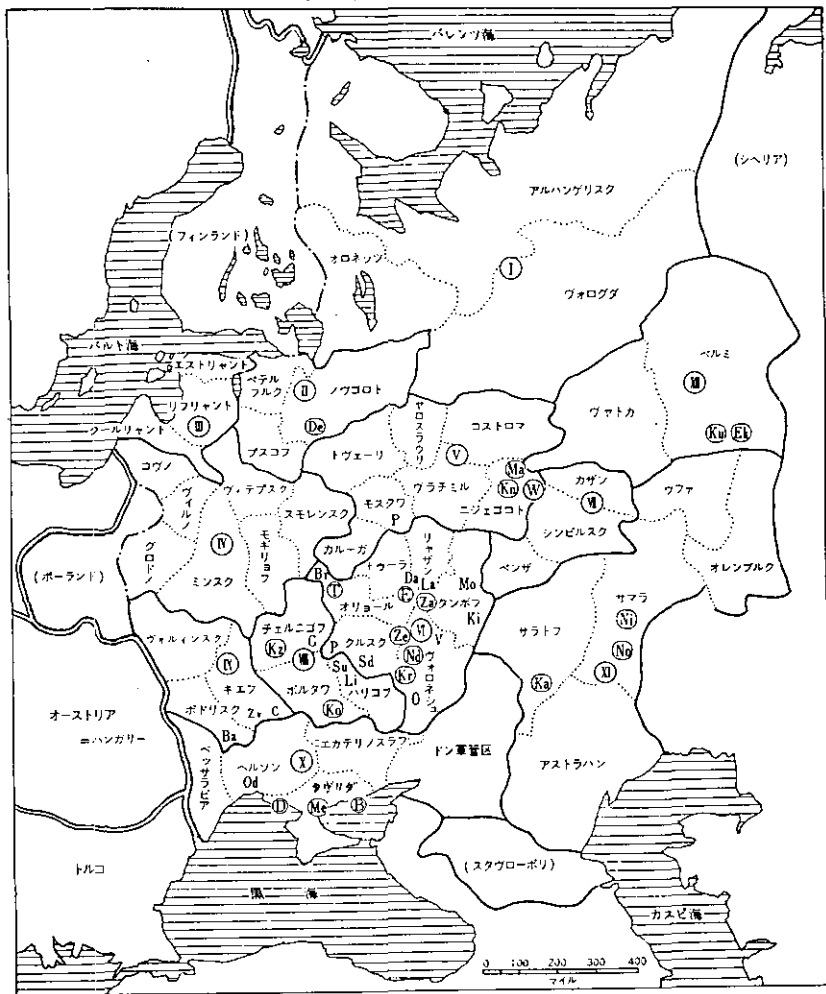
をあげることが多かった。しかし、本稿で検討したように、その主因は、外的要因にあったと思われる。もちろん、国内的要因が全く作用しなかった分けではない。だが、穀物輸出を一つの絆として、資本主義世界体制の中に深く組み込まれつつあったロシアは、世界経済の変動に対応すべく、その国内的条件が許す範囲内で、穀物生産を変化させていった、又は、そうせざるを得なかった、という方が適切ではないだろうか。

[注]

1. П. И. Ляшенко, указ., соч., стр. 147
2. ライ麦と同様、エン麦は、普通の農民にとって、貨幣収入の重要な源泉であった。エン麦の収穫の半分は、前金の支払の為に、秋に販売されたという。エン麦は、飼料(特に馬の飼料)として用いられた。(А. С. Нифонтов, указ. соч., стр. 258—9)
3. П. И. Ляшенко, указ. соч., стр. 8-10.
4. Там же, стр. 7—8
5. Нифонтов, указ. соч., стр. 232—3
6. Там же, стр. 265
7. キタニナは、80年代に限って、小麦・大麦の播種面積の拡大を阻んだ原因として、世界農業恐慌をあげてはいる。(Т. М. Китанина, указ. соч., стр. 27)

19世紀から20世紀初頭におけるロシアの穀物生産

ヨーロッパ部・ロシア50県(19世紀末)



- | | | |
|------------------|-----------------|---------------------|
| I …… 北極地方 | V …… 中央工業地方 | IX …… 西南地方 |
| II …… 北西部(沿湖)地方 | VI …… 中央農業地方 | X …… 南部ステップ(新ロシア)地方 |
| III …… バルト海沿岸地方 | VII …… ヴォルガ中流地方 | XI …… 東南部(ヴォルガ下流)地方 |
| IV …… 西部(白ロシア)地方 | VIII …… 小ロシア地方 | XII …… 沿ワラル地方 |

県の地方別グループ分けは、文献によってこれとは異なるばあいがある。地方名称についても同じ。

出典 日南田静真『ロシア農政史研究』(御茶の水書房, 1966年)